

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990200040		
法人名	特定非営利活動法人 醍醐会		
事業所名	醍醐の森川崎グループホーム		
所在地	栃木県足利市川崎町2316		
自己評価作成日	平成27年11月27日	評価結果市町村受理日	平成28年3月4日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人栃木県社会福祉協議会
所在地	栃木県宇都宮市若草1-10-6
訪問調査日	平成27年12月15日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当ホームは、認知症高齢者に対して家族、地域への理解を深める為に積極的に夏祭り、家族会、クリスマス会等のイベントを企画し、実行している。特に夏祭りは、隣の施設と合同で開催され、職員、家族会、ボランティアから構成される実行委員会を組織し、地域住民にも参加を促し、参加数400人を超える当法人、地域の最大のイベントの規模となっている。そうした地域との連携は、常日頃からの入居者一人一人が地域の一員として生活させることに力を注いでおります。広大な敷地の花壇には季節を感じられる花・樹木が植えてあり、又農園には、季節の野菜が栽培され、それを入居者が世話をすることによって社会的役割を与えて、自信を持って「ここが『我が家』です。」と言えるように支援している。当ホームでは、併設するインフォーマルな宿泊事業も利用し、医療施設と緊密な連携して、ターミナルケアを行っている。開所以来、12年の間に、既に33名の入居者の「看取り」を行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当法人は、市内で代々旅館業を営み、家族の介護をきっかけに福祉の事業に取り組んだ。敷地内には、認知症専用のデイサービスや複合型サービスセンターがあり連携を図っている。渡良瀬川沿いの住宅地の広々とした所に当事業所はある。熱意あふれる理事長を中心として、開所以来、積極的に地域と関わり、夏祭りは多くの参加者があり地域の大きなイベントとして定着している。「温かい家庭的な雰囲気大切に、一人ひとりの尊厳を守り、地域に根ざし自立した生活を送るよう、一緒に楽しくゆっくりと安全な生活を送ります」を基本理念とし、職員は、おもてなしの心づかいで穏やかな環境のもと支援している。利用者も各々役割をもち、それが生きがいになっている。家族会があり、自主的に運営し事業にも協力的である。医師や看護師・家族の協力のもと積極的に看取りに取り組み実績を重ねている。広大な敷地には、四季を通じて沢山の花々が植えられ利用者の憩いの場であり、楽しみにもなっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月、管理者、全ての職員が参加して行われる定例会議に於いて、地域に密着し、そして地域に貢献できる施設の運営を目指して、その事業理念を共有している。	開設時に職員全員でKJ法を使い基本理念を作った。申し送り時や定例会議で職員が理念を共有し、温かいケアに努めている。介護理念もあり、今後もその理念を継続し、更により良い支援を目指している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会費を納入し、回覧板を届ける届ける等、職員と入居者が一緒に行い、積極的に町内会の事業に参加し、当ホームでも開催されるイベントを通して地域の一員としての自覚を持たせるよう支援している。	自治会に加入し、地域の祭等のイベントに参加する他、地域住民が参加できる夏祭りやクリスマス会などを開催し、交流を図っている。様々なボランティアの来所もあり、利用者の楽しみ事になっている。地域の学童保育の実施も予定している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	当ホームで開催される夏祭り、クリスマス会等のイベントへの参加要請等によって認知症の理解を促進するばかりではなく、積極的に町内会活動に参加する度に認知症の理解と施設の関わり方の説明の機会を得ている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議委員に日常も含めて積極的に当ホームで開催されるイベント等に参加して頂き、運営推進会議開催時、当ホームの外部評価等を公開し、それについて改善点がないか、積極的に意見を吸い上げるようにしている。	ほぼ定期的に運営推進会議を開催し、終了後家族会、敬老会や夏祭りのイベントを行っている。育成会、民生委員、家族会、利用者が参加し、事業所からの報告の他、イベントの実施方法等、様々な意見が出され、積極的な意見交換、情報共有に努めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	当ホームの運営推進会議の委員である職員、行政関係者と共に「協働」を礎に信頼関係を築くことが出来るようになった。	新規事業や手続きの相談など、市職員との繋がりがあり情報交換を行っている。認知症サポーター養成講座の講師の依頼もあり、積極的に関わって信頼関係を築いている。運営推進会議の議事録も提出している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月、管理者、全ての職員が参加して行われる定例会議に於いて、身体拘束の定義や事例を挙げて話し合いの機会を設けてメディスンロック防止等についても取り組んでいる。	毎月の定例会議で、身体拘束の対応マニュアルについて事例検討を行っている。玄関施錠については、利用者の状況を加味し、全利用者に同意書もらった上で安全の為に必要があれば行う事がある。職員は言葉づかいには注意し、丁寧で出来るだけ短い言葉で会話を心がけている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月、管理者、全ての職員が参加して行われる定例会議に於いて、「栃木県高齢者虐待対応マニュアル」を中心に勉強会を開催し、その防止に努め、事業所外でも虐待があった場合の通報義務等についても討議、検討を重ねている。	/	/

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前地域福祉権利擁護事業を利用していた利用者がいた為、十分に理解しているが、毎月、管理者、全ての職員が参加して行われる定例会議に於いて、その必要性がある対象者の有無を検討している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	当ホームへの入居契約締結時、可能な限り、管理者、計画担当責任者又は、それに準ずる職員が担当し、詳細に至るまで説明し、理解、納得を図り、改訂がある場合には当ホームで組織されている家族会の総会等で説明し、新たな契約締結を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議委員に日常も含めて積極的に当ホームで最際されるイベント等に参加して頂き、運営推進会議開催時、当ホームの外部評価等を公開し、それについて改善点がないか、積極的に意見を吸い上げるようにしている。	家族会があり、自主的に運営され、夏祭りには焼きそば店を出店する等、各種イベントに積極的に参加・協力している。利用料の支払いに来所する際、家族の意見や要望を直接聞き大切に活かしている。感謝の声も寄せられ、職員の励みになっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、管理者、全ての職員が参加して行われる定例会議に於いて、運営や各々の入居者の情報の共有、それに対する介護、それに対応する為の用具、器具等の購入、使用方法に至るまでの討議をしている。	理事長や管理者は、日頃から職員との会話の機会を持ち、意見を取り入れる体制をとっている。定例会議においては、より良いケアのために用具、器具の工夫を検討する等、活発な意見が出され、情報共有もされている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者は、法人の三役会や理事会等に於いて各事業給与水準等の意見を吸い上げており、定例会議に於いても職員が要望する介護し易くする為の福祉用具等の充実を図り、管理者と職員と距離を近くして職場環境整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者は、個々の職員の介護能力を把握しており、毎月、全ての職員が参加して行われる定例会議に於いて、勉強会を開催し、更に法人内外の研修に積極的に参加させ、それを又、定例会議でフィードバックさせている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	当ホームは、栃木県グループホーム協会、栃木県小規模ケアネットワーク、あしかが介護支援専門員協会等に所属し、職員をそこで開催される研修会等に積極的に参加させ、他の事業所との交流を図り、その良い点を取り入れている。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	併設されている認知症専用デイサービスの利用していた利用者が入居者となる為、殆どの利用者本人との安心確保は、既に構築されている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	現在の生活状況や不安なことを十分時間を掛けて聞き取り要望に添えるようしています。安心して利用開始に繋げるよう努力を惜みず信頼関係に努めています。そして希望に添った支援に繋げ安心して暮らせるようにしています。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当ホームでは、グループ関連事業所に居宅支援事業所を設置していない。従って、特養ホーム等で併設されている居宅支援事業所で横行する「抱え込み」を行っていない。市民に支持される施設を目指し、介護保険制度の説明を懇切丁寧に行い、他のサービスについても積極的に説明を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者様と共に楽しく暮らすことを基本に考え調理関係、環境を整えるなど一緒に行っている。自室清掃は出来る範囲でお願いし皆さんと気持ち良く過ごせるようにしている。時には昔の料理を教えて頂き参考にすることもあります。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用料金の支払いは、事業所へ家族等が現金持参を原則として、入居者本人とその家族との絆が切れなないようにしている。更に家族会を組織し、家族への各種イベント等の積極的参加を促し、職員と共の入居者を支えていることを認識して頂けるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者本人が「ここが私の住まいです。」と認識して頂けるようにし、家族を含め、家族の了解を得て、親戚や知合い等の面会を積極的に受け入れている。又、買い物等で出掛ける際、各々の入居者の馴染みの場所を訪れるようにしている。	利用者が昔よく行った場所への買い物、お寺めぐり、遠方の結婚式への参加など、できる限り希望に沿った支援をしている。事業所の挨拶運動を活発にするなど工夫し、知人の訪問が続くよう、良い雰囲気作りにも努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	当ホーム内で入居者が孤立しないように洗濯物タタミは、毎夕の入居者同士が協力して行う作業とし、散歩等で他の入居者の車椅子を押してもらったり、相互依存の関係を構築できるように支援している。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	重篤となり、入院した場合、退居を余儀なくなった入居者は、退院後、同グループ事業所の看護小規模多機能施設に繋げるか、併設するインフォーマルの宿泊事業で支援するようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常に声掛けを行い、「どうしたいのか?」、「どう暮らしたいか?」等を入居者本人に確認して、それを家族に伝え、要望を叶えるようにしているが、困難な場合には代替え等を考えて支援している。	日頃から、食物・飲み物の嗜好調査をしたり、外出について希望を聞き、本人本位に検討している。困難な場合は、家族から聞き取りを行い情報を得ている。花の水やり、お茶入れ等、可能な範囲で一人ひとりが役割を持って生活できるよう支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントの時期には、基本に立ち返り、再確認している。現在の暮らしに適しているのか?環境に問題は、ないか?等をサービス利用計画等の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	各々の入居者のその日のバイタルチェックや睡眠状況で心身状態を把握し、一日の過ごし方を決定するが、入居者本人の要望も大切にしよう支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的カンファレンスを行い、計画に沿った支援が出来ているかの振り返り、計画変更時には、数回のモニタリングを調理、デイ看護職員を含めた職員全員で行い、計画については、本人とその家族の意向を最優先し、担当の職員を中心に職員全員によって支援内容を決定し、作成されている。又定例会議に於いても討議の機会を得ている。	利用者・家族の希望や協力医の意見を参考に、週2回のカンファレンス、月1回の定例会議で担当職員が話し合いを行い、ケアマネジャーが作成している。毎月モニタリングを行い、家族に報告し、より良く本人らしい暮らしをするために支援内容を決定している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日支援経過記録を残しアセスメントの参考にしてはいる、又変化に対しては細かく記録し職員全員が把握できるようにしている。そして次の計画に反映しています。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	常に入居者本人に適したサービスを提供出来るよう、入居前のケアマネジャーに相談や家族に注意点を伺い、場合によっては、当ホームの認知症専用デイサービスとインフォーマルの宿泊事業で柔軟に対応すると共に隣接する同グループ事業所の運営する看護小規模多機能施設と連携して支援できるようにしている。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買物、外食等で入居者と職員が一緒に出掛ける際は、先方に連絡を入れたり、事前に訪問し、認知症を説明して理解を求め、協働して入居者が安心してそこを利用できるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	当法人の委託医が隔週で往診してもらっている。その為、各々の入居者の状況を的確に伝え、状況が変化し、検討の時期になった場合は、家族等を交えて納得がいく診察が受けられるよう支援している。些細な変化でも委託医に連絡し、他の受診時にも経過記録を作成し、家族と情報共有出来るようにしている。	2週間に1回、事業所の協力医の訪問診察がある。内科以外は専門的な診察を適切に受けられるよう、経過記録を持参し情報を提供している。併設のデイサービスに常駐の看護師がおり、日常的に医療面のサポートを行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設される認知症専用デイサービスの看護師と情報を共有し、些細な変化も見落とさないように適切な受診に繋がられるようにしている。更に当法人の委託医の看護職員にも同様に情報を共有し、支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	後方支援病院と協力契約を締結し、入院先を見舞いや訪問を行った際には、先方の医療機関関係者と情報交換を密にし、出来るだけ早期に「住み慣れた家」に戻れるように努めている。退院後の通院には、その入居者の状況を書面を添えて受診出来るようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	大きな変化があり、改善の見込みがないと委託医が診断した場合、家族に直接、説明してもらい、当ホームの可能な介護範囲を納得がいくまで説明し、その方針を決定し、それを入居者本人、その家族、委託医、職員と共有しながら支援している。	終末期のあり方や看取りについて、共通認識を持つよう、家族、協力医、職員間で話し合いを行っている。確認書も作成し、納得のいく最期を迎えられるよう支援している。終の棲家としてホームでの最期を希望する方が多く、身寄りのない方の看取りを支援したこともある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎月、管理者、全ての職員が参加して行われる定例会議に於いて、当ホームに併設される認知症専用デイサービスの看護職員の応援を受けて、応急処置や急変時の指導や訓練を適時行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防訓練は、年2回、避難訓練は、年1回行っている。夜間、職員が一人になった場合を想定して、近隣住民に各々の入居者を担当してもらい、訓練を行っている。再三、オール電化の施設にするように行政から勧められて来たが、太陽光発電、蓄電自動車を導入し、石油、ガス等にリスク分散し、施設運営してきた為、先の震災時それに耐えうる施設と確信した。	年2回、昼夜を想定した消防訓練と、日頃から職員対象の訓練を行っている。災害時に強い動力源を設置し、近隣住民には避難時の利用者誘導の担当をお願いするなど、地域の力も借りた防災体制を築いている。備蓄も整えている。	

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	毎月、管理者、全ての職員が参加して行われる定例会議に開催し、画一的な介護にせず、常に個別ケアを意識の中に置き、一人一人の人格を尊重しながら、且つ、プライバシーを守りながら、優しい対応を心掛けている。	全職員が利用者の立場に立って、プライバシーを守って人格を大切にケアに努めている。特にトイレや入浴の際には羞恥心に配慮し、言葉かけもさりげなく行っている。広報誌の写真掲載にもあらかじめ同意を得ている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	毎月、管理者、全ての職員が参加して行われる定例会議に於いて、常日頃から優しい対応で、信頼関係を築きながら、各々の入居者本人の思いを知り、自由に自己表現できるようにしている。そうすることによって自己決定出来るように支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員本位の介護ではなく、入居者本人の心地良い場所の提供やその雰囲気や優先し、「今日、何がしたいか?」「どう過ごしたいか?」を伺い、その希望に沿って支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	普段から入居者本人の要望に沿った身なりを整えるようにし、特に外出する際には、女性として化粧をする等、お気に入りの服に着替え、男性も同様に念入りに髭を剃る等、身なりを整えるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	当法人の畑に旬の野菜を収穫し、彩りや盛付けに工夫し、健康面を考えながら出来るだけ薄味で食事の提供をしている。配膳も同様、片付け等に関しては、所定の場所で持ち運び出来る入居者には、お願いしている。	昼は管理栄養士が、朝と夕は職員が献立を考え、嗜好や体調にあわせミキサー食やキザミ食など個別対応し調理している。畑で収穫した野菜や差し入れの食材を活用し、旬を大切にしている。味見や片付けなど職員と利用者が一緒に行い、時には外食も楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立は、管理栄養士が行っていて、食材、一日の栄養バランスが把握できるようになっている。特にカルシウム、鉄分の補給が出来るよう、それらを多く含む食品を摂取出来るように心掛けている。水分摂取は、口径補水液を作り、摂取し易いように努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食前に誤嚥防止の口腔体操を行っている。毎食後、口腔ケアを行い、週3回、ポリデント消毒を行っている。歯磨きは、本人に任せるが、認知症進行により困難な場合には、職員が最終的に確認を行っている。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来るだけ日中は、トイレ使用の支援し、オムツやトイレパットの使用を減らすようにしている。認知症進行により排泄機能の低下している入居者に関して排泄パターンを知り、誘導し、排泄の失敗を防止するようにしている。	可能な限り日中はトイレで排泄できるよう支援している。一人ひとりの排泄パターンを把握してトイレに誘導し、排泄の失敗が無いよう、オムツやパットの使用時間を短くするなど、利用者に合わせて工夫をしている。スキンケアも大切にしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝のラジオ体操や屋外の広大な敷地を散歩することによる運動により、水分摂取量の確認や繊維質を多く含む食品を摂取ように心掛け、職員がそうした取り組みが出来るように摂取表を作成している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	希望があれば、毎日、入浴可能な体制になっており、入浴時間は、昼食後から夕方にかけて時間帯で支援しているが、ADLが低下した場合、併設する認知症専用デイサービスのリフト浴を利用して入浴支援を行っている。	利用者の希望や状況に合わせて、ほぼ1日おきに職員一人の介助で入浴を支援している。状態によっては同じ建物内のデイサービスのリフト浴を使用することもある。菖蒲湯や柚子湯、入浴剤等で季節感を取り入れている。声かけに工夫し、リラックスできるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活パターン表を作成し、睡眠状況を確認し、日中は、心地良い疲労感が得られるような活動を提供することによって安眠に繋げている。但し、普段より疲労感が見られる場合は、休息を促すようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員全員は、常に各々の入居者の疾病とその症状を把握し、処方箋を確認出来るようにしている。入居者の服用の副作用や効果を記録し、委託医の往診の際は、その症状や変化を伝え、経過観察を記録して支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	9人のグループを家族として捉え、様々な役割を担うことで張りのある暮らしが出来るように支援している。自由時間には、楽しみ事で過ごせるように考慮し、ドライブ等で気分転換させるように退屈無い過ごし方を心掛けている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	当法人の組織する家族会に協力してもらい、年2回近隣市町村へ小旅行に出掛けているほかにショッピングモール等にお茶を持参して出掛けたりしている。又、入居者が希望する場所にも出掛けており、日常的に外食にも出掛けるようにしている。	日常的に近隣や、花に囲まれた敷地内の散歩を行っており、地域の方との交流もある。家族会が中心となって計画する家族同伴の春の小旅行、職員との秋の小旅行など、積極的に外出している。実家の近くへのドライブや菊祭りやバラを見に行ったり、買い物にも出かけている。	

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	施設の買物に出掛けた際は、購入した金額の支払いを各々の入居者をお願いしている。希望があれば、又はその能力がある場合は、入居者本人の持っている財布より商品購入が出来るように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、電話も利用出来るようにしており、手紙等も同様に葉書、便箋もいつでも利用出来るようにしてある。希望があれば、いつでも家族や友人等と連絡可能な状態にしてある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間の温度、湿度は、適温適湿に保つように配慮し、トイレや調理室等がわかり易いように表示してある。季節感を感じられるような楽しい掲示物を作成している。又、庭に咲いている花を屋内に飾り、その空間作りをしている。	共用空間の居間には、白いピアノや暖炉風の温風ヒーターが置かれ中庭も眺められる。自動室内換気ができるシステムを導入し、快適な共有空間を整備し、トイレ掃除をこまめに行い、臭いにも配慮している。季節に合わせた飾りつけや、庭に咲く季節の花々を室内にも取り入れ利用者を楽しませている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	椅子等をホールだけでなく廊下や玄関先にも置き、どの居場所でも自分の時間を過ごせたり、気の合った入居者同士で過ごせるように、又自分の部屋に招き入れられ、ゆっくりと過ごせるように配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内の配置は、入居者と家族が決定し、自宅にいるような雰囲気でも過ごせるようになっている。入居前迄、使用していた家具を持ち込み、自分の生活スタイルを維持し、心地良い環境を整えている。	6帖の畳と3帖のフローリングからなる各居室には、湿度計のついた時計、押入れ、エアコン、ベッド、カーテンが備え付けられている。使い慣れた家具を持ち込み、自分の作品や家族の写真が飾られ、自分に合った部屋作りがされている。利用者同士の団欒の場に居室が使われる事もある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	共用の場所には、絵や大きな文字で入居者の目的がわかるようになっている。入居者が入居以前の自宅のトイレの位置が左右によって入居する部屋を安全かつ出来るだけ自立した生活が送れるように決定している。		